
星屑明星～テイルズオブヴェスペリア～ <チャット>

月詠輝夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星屑明星くテイルズオブヴェスペリアくチャットく

【Nコード】

N2879Z

【作者名】

月詠輝夜

【あらすじ】

本編のチャットです。

会話文のみとなっております。

本編です <http://ncode.syosetu.com/n8485y/>

愛称

ユ一「行くぞ、セアラ」

『やーん！待ってよユ一りいVV』

エス「……」

ユ一「ん？どうした？」

エス「あ、いえ……」

『何々？どうかしました？』

エス「何でもないですよ。さあ行きましょ」

『？ まあエステリーゼ様が言うのなら……』

ユ一「……」

エス「セアラ、ですか……」

セアヴィラと呼びたいけど言い出せないエステルだったり、
きつといつか呼べる日がくるとわたしは信じてます
ふたりの間にはきつとかなりの溝がありそうです…

気にするな

『よっし、完璧っ!』

ユ一「……」

『ほえ?ユ一リってば僕にそんなに熱い視線向けちゃってっ僕の戦う姿に惚れちゃった?』

ユ一「バーカ」

『でーすーよーねー』

ユ一「ま、確かにお前が銃で戦ってるのは初めて見たな。昔は剣一筋だったじゃねえか」

『あ…うん、ちょっとね』

ユ一「! 悪い。思い出させちまったか…」

『ううん!気にしないで!!心配してくれてありがとうとっっVV』

ユ一「お前こそ気にすんなよ」

『あっは、何を?何にしたって僕は全然気にしてないってばっVV』

ユー「強がりもほどほどにな、セアラ」

『……………もう、相変わらず優しいんだから。大好きだよ、ユーリ』

剣が嫌いなセアヴィラ。

さりげなくセアヴィラに優しいユーリがいます、

昔話

『はあん！ユーリと街の外に出るなんて久しぶり〜っvV』

ユ一「確かにな。それに昔はこんなとこまで来なかったし」

『子供だったからね〜』

ユ一「ま、どっかの誰かさんは言うこと聞かずに魔物に襲われかけてたけど」

『ひいひい！それは言わない約束でしょーっ！』

ユ一「勝手に一人で突っ走りやがって…」

『うっ……だって綺麗な花見つけたからユーリにあげようと思って〜…』

ユ一「知ってるよ。お前は昔っからほんと無茶するヤツだったよな」

『ユーリ限定っ』

ユ一「アホか。嫌いになるぞ」

『ぎゃー！！それだけはダメーっ』

セアヴィラをからかうユーリさん (^o^三^o^)
それでも構ってくれるのが嬉しいと思ってるセアヴィラはDMなん
でしょうね

効かない治療術

『っ…………』

ユー「どうした、まだ気分悪いか？」

『ちよつとだけ。でも平気！ユーリが心配してくれたから』VV』

ユー「はいはい、空元気はそれまでな」

『別にそんなんじゃないよ』

ユー「…………エステルの治療術が効かないのに関係あんのか？」

『それは…………僕にもよく分かんない。エステリーゼ様とは三年ほど一緒にいるけど、治療術を施されたのは初めてだから』

ユー「原因不明、か。なら回復は自分かグミでやらないと、ってわけだな」

『うん…………でもユーリの愛があれば僕の体力は常に満タンだよ』V』

ユー「誰がやるか」

『あだっ！ユーリ酷いっ』

ユー「酷くねえ酷くねえ」

元気だけが取り柄なセアヴィラ？
セアヴィラが元気だとユーリも安心する様子です ^ p ^

大好きな理由

カロ「ねえセアラ」

「ん？何かな？」

カロ「セアラはユーリのどこがいいの？他にいい人沢山いない？」

「ユーリ以外にいい人なんていないよ！？何言ってるの！？」

カロ「ああうんセアラにとったらそうだね。……で？」

「考えたことはない」

カロ「へ？」

「気付いたら好きになって、ずーっとユーリばかり見てきたからどこが好きだとか考えたことなかった。つまり僕はユーリの全てを愛してるんだよ！あの透き通った素敵な声も、さらっさらの黒髪も、真っ直ぐな瞳も、逞しい胸板も、長くてしなやかな指も、強く優しいところも！ぜーんぶっVV」

カロ「はは……凄いな……」

「あっ今引いたでしょ！？」

カロ「そ、そんなことは……」

『いや、別に。とっくに自覚してるから。それでも僕は、ユーリが大好きだ。振り向いてくれなくても、僕はユーリと一緒にいたい』

カロ「……そっか。やっぱり凄いな、セアラは」

『やだ、カロールに褒められても嬉しくないよっ』

カロ「酷くない？」

もうヤンデレ決定じゃない？
これ決定じゃないかな？

お揃い

リタ「はー、あんたらって付き合ってたの?」

『えへへ〜分かるう?』

ユー「んなわけねえだろが」

『あだっ!?!? ユーリってばひっどーいっ』

リタ「どう見ても付き合ってるようにしかみえないんだけど。魔導器とかおんなじだし。ペアルック?」

ユー「ちげーよ。こいつが勝手に一緒のもん作りやがったんだよ」

『だっってお揃いがいいじゃん! ペアルックなんて素敵〜VV』

ユー「はいはいはい」

リタ「あんたら見ると頭痛いわ……」

誰から見ても付き合ってるようにみえるんですね（笑）
まあセアヴィラの一方的ですが

やるんじゃないかった

『はあくん……もうユーリったら……額にキスなんて大胆なんだからあ やくんっ僕幸せだよおVV』

カロ「……ユーリ、さっきからセアヴィラあんな調子なんだけど」

ユー「あー……」

リタ「ばかつぽい……」

『えへへ』

ユー「…セアラ」

『！ なあにユーリ』

ユー「なんでもいいから落ち着け」

『やだあ、僕はいつでも落ち着いてるよVV』

ユー「（やるんじゃないかった…）」

幸せオーラ全開なセアヴィラですん（笑）
ユーリはただ恥ずかしいだけ

冷たい目

エス「あの、ユーリ」

ユー「ん？」

エス「たまにセアヴィラって冷たい目をしますよね……」

ユー「……そうか？」

エス「あの目は冷たくて怖くて、背筋が凍りそうなんです……」

ユー「……」

エス「わたしはセアヴィラにあんな表情をして欲しくはありません……」

ユー「それはセアラ次第だ。あいつのトラウマはこっぴどく脳に焼き付いてるからな」

エス「…セアヴィラ」

ユー「まずはお互いもうちっと距離を縮めたらどうだ？」

エス「距離、です？」

『あー！ユーリ浮気してるっ！！』

ユー「だからちげえってーの！！」

エス「……セアラ」

エステルとセアヴィラの距離はかなり遠い気がします。
様呼びと敬語ですからね！

なつかれてる？

エス「なんでラピードはセアヴィラになついでるんです？」

『なついでる、んですかね…』

エス「違うんです？」

『だって尻尾で擦られたりするんですよ。絶対からかわれています』

ラピ「ワフツ！」

『あ、でもラピードは好きですよ！もふもふしてます』

エス「羨ましいです、セアヴィラ」

ラピ「バウツ」

『ぎゃー！ラピード、重たっ！？』

ラピードはちゃんとセアヴィラが好きですよ、多分
まあからかい甲斐のある相手だとも思ってますが（笑）

お互い様

ユー「セアラ」

『ユーリ…』

ユー「怖いならもっと下がって」

『……へーきへーき！それにユーリが来てくれたからねっ』

ユー「現金なやつだな。……無理しやがって」

『ユーリの気のせいだよ！僕はいつも通りじゃん！』ってかお互い様だよ！』

ユー「……ま、そう言っことにしてやるよ。じゃ、行くか（ほんと、ほっとけねえ奴…）」

『やーんVVVV待ってよう！』

心配性なユーリさん(〇・v・〇)
でも弱気なところは絶対見せないセアヴィラである。
そして無理する彼女w

双銃

『よーし、いい感じ！』

リタ「……あんたさ、弾を一切充填してないけどその銃どうなったんの？」

『ん？ああ、これはエアルを凝縮して弾代わりにしてるんだよ』

リタ「エアル、ねえ……」

『最も、僕にも良く分かってないんだけど』

リタ「は？あんた、そんなもん使ってるの？」

『うん。一応家にあつたものだし、大丈夫かなって。使えるものは使わなきゃ！それに使いやすいつてのがあるからね』

リタ「ふうん……ちょっと見せて」

『いーよー』

リタ「（……これって魔導器？なら魔核はどこに……腕に付けてる武醒魔導器から直接？でもまさか……魔導器は直接魔核を嵌めないと使えないはず。じゃあなんで……）」

『リタ〜？そんなに見詰められても僕にはユーリが…』

リタ「違うわよ！…っああ、もう、ほんとあんた見てると頭痛い！」

『あは、冗談じゃん〜』

リタ「あんたのはどこから本気でどこまで冗談かわかんないのよ」

自分でも仕組みが分からないセアヴィラですん（＾p＾）

ふたりって

カロ「あのふたり、絶対付き合ってるよね」

リタ「端からみればそうにしか見えないわよ」

カロ「でもセアラもセアラだね。あんなにあしらわれても諦めないんだもん」

リタ「まあ、本人は構ってもらえるだけでも嬉しそうだからいいんじゃない？」

『やんユーリってば照れちゃってえ』

ユー「だから照れてねえって」

『えへへ〜!』

ユー「……はあ」

カロ「ユーリも満更じゃない感じだよね……」

リタ「あいつら見てるとなんかある意味イライラしてくるんだけど」

カロ「あはは……」

早く付き合っちゃえよ！

ってことですよ

セレーネ

リタ「あ、あんた、あのセレーネ公爵家の娘!？」

カロ「嘘でしょ!？」

『何だよう、信じられない?家紋見せようか?』

ユー「ま、そうなるだろうな」

『ユーリまで酷い!』

リタ「はあ…王家に次ぐ公爵の娘がこんなとは…」

『リタ?僕泣いちゃうよ?泣いていい?』

ユー「まあこいつにも色々事情があんだよ」

カロ「事情って…事情でこんなになる?ってぎゃあああああ!?!?
銃!銃向けないで!！」

ユー「セアラ」

『あは』

誰もセアヴィラが公爵家の人間だとは思わないでしょうね（笑）

行けば？

リタ「ちょっと、あんた顔酷いわよ」

ユー「は？オレが？冗談だろ」

カロ「気になるなら行けば？」

ユー「何を気にしてるって……って、あのおっさん、近すぎじゃねえか……？」

リタ「こっちもこっちで重症ね……」

カロ「ね、ユーリ。行ってきなよ」

ユー「だからなんでだよ」

リタ「態度が大違いね……」

レイヴンに嫉妬するユーリさんですん(^ o ^)
あ、うちのユーリは奥手すぎですw w w
なんだろ、わたしが書くとみんな奥手になるw
もっとラブラブさせたいのに(´・・´)

中身は

『うっーん……ユーリの愛が足りない……』

エス「セアヴィラ、大丈夫です？」

『多分大丈夫です』

ユー「フラフラなやつが大丈夫なわけないだろ。まったく……手加減しろっつーの……」

『ユーリの心配が僕の糧になるうゝゝゝゝゝゝゝ』

ユー「置いて行っていいみたいだな」

『あばばば！待ってごめんなさ〜い！』

エス「中身は元気みたいですね……」

取り敢えず中身はいつも通り元気なセアヴィラです（笑）
ユーリがいれば元気なんですw
なんていう単純っこwww

豹変

エス「さっきのセアヴィラ、おかしかったですよね……」

リタ「大方パーティに嫉妬でもしたんでしょ」

カロ「嫉妬だけであんなになる……？」

リタ「それもそうだけどあの子の場合異常なのよ、きつと。ああなるくらいにユーリが大切なんでしょ」

エス「確かにさっきも自分が犠牲になる覚悟でユーリの前に飛び出しましたし……」

リタ「自分がどうなるかと彼女は大切なものを守るでしょうね。勿論、あんたもよ」

エス「……はい。セアヴィラは言いました。心を救ってくれたわたしを必ず守りきる、と」

カロ「それだけふたりはセアラの中で大きな存在なんだね」

エス「でもわたしの所為で傷付くセアヴィラは見たくないです」

リタ「まあそれはちゃんと本人に言わないとね」

エス「そう、ですね……」

ヤンデレなセアヴィラ、です。
もしヤンデレでございませぬ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2879z/>

星屑明星～テイルズオブヴェスペリア～<チャット>

2011年12月14日18時59分発行